

カボチャ・モザイク・ウイルス病の生態と防除に関する研究

第4報 ほ場栽培キュウリのアブラムシの寄生とモザイク病の発生

川 越 仁・海 田 春 美

(宮崎県総合農業試験場)

KAWAGOE, H. and KAIDA, H.

Ecology and Control of Watermelon Mosaic Virus.

4. Relation between the Parasitic Aphids and Occurrence of Mosaic in Field Cucumber.

本場内ほ場に、6月中旬及び8月下旬にキュウリをほ種し、アブラムシの寄生とモザイク病発生との関係を明らかにする目的で調査を実施した。

調査方法

アブラムシの調査は、寄生株率が100%に到達するまで3～5日おきには場内のキュウリ全株、全葉について行ない、寄生株率が100%に到達した日数をは種日から算定した。

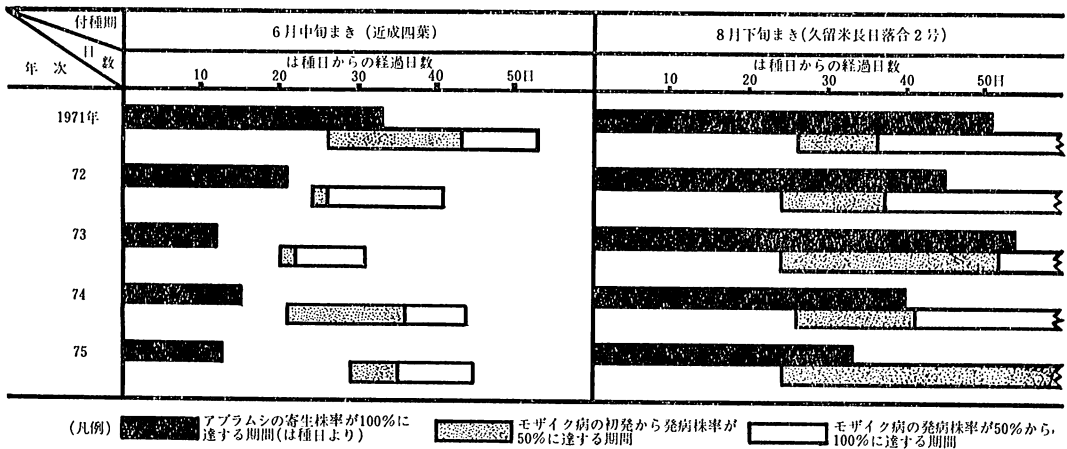
モザイク病の調査は、アブラムシ調査と同様に全株調査し、初発日及び50%ないし100%発病株率到達日を記録した。なお発病株は一定時期には場内から任意に採集して、検定植物によるウイルスの種類同定調査を行なった。

結果および考察

モザイク病発生株のウイルスの種類を同定した結果は、5ヵ年の調査結果とも6月中旬まきキュウリではCMVとWMVの重複感染が圧倒的に多く、これに対して8月

下旬まきではWMVの単独感染株がほとんどを占め、CMVの検出率は極端に低く、両は種時期でのCMVの検出率が明らかに異なった。アブラムシの寄生株率とモザイク病の発生経過は下図に示すとおりで、6月中旬まきキュウリでは、アブラムシの寄生株率が100%に到達する日数が短い年次は、モザイク病の発生株率もはやくから上昇し、発病株率が100%に到達する時期もはやい傾向が明らかに認められた。しかし、8月下旬まきキュウリでは前述のような傾向は判然としなかった。また同一年次の6月まきと8月まきキュウリでのアブラムシの寄生株率、モザイク病の発病株率についても関連は見出しえなかった。

以上の結果から、アブラムシの寄生株率とモザイク病の発生との関連は、キュウリのは種時期によって異なり、この原因については明らかにしえなかったが、今後周辺のアブラムシとモザイク病の伝染源の把握と飛来虫の保毒状況を調査することによって明らかにしたい。



アブラムシの寄生株率とモザイク病の発生経過